

が可決されたため、大正十年に東京高等工芸学校の設立をみたと言われる（馬場秋次郎「創立当時の思い出」『創立40周年記念』昭和三十六年。千葉大学工学部）。

安田は本校へ委託された工業図案科生徒全員が卒業したあと、大正六年七月に本校兼任を解かれた。鹿島英二は同五年に一旦本校専任となったが、彼もまた同八年には辞職した。左記の文書にはその「工業的」授業法が本校の教育目的に適合しないという理由で辞職に決定したことが明記されている。

#### 休職上申理由

東京美術学校教授 鹿島 英二

右ハ先年東京高等工業学校ノ工業圖案科生徒ノ教育ヲ本校ニ委託セラル、ニ方リ同校教授ヨリ転任シタルモノニ有之候處同科生徒ハ既ニ一昨年七月悉ク卒業シ了リ爾來本校圖案科第二部ニ課スル図案法及実習授業ヲ担任致サセ居リ候處同人カ授業法ハ工業的ナルヲ以テ美術家ヲ養成スル本校教授トシテハ不適任ニ付此際他ノモノヲシテ代ラシムルコト、ナシタルカ故ニ休職上申致候次第第二有之候也

〔大正八年職員ニ関スル書類庶務掛〕

#### ⑫ 二科会発足

大正三年十月十日から三十日まで上野公園竹の台陳列館で第一回二科会美術展覧会が開催された。日本画界に院展が登場したのと同じ時に洋画界にも二科展という公募展が生まれ、ともに文展と対峙し

て在野派の勢いを示すようになったのである。二科会は印象派、後期印象派、フォーヴィズム、立体派、未来派などの西欧近代絵画の新様式の移入を歓迎しつつ特に大正期において幾多の個性的作家を育て、日本の近代洋画に一つの成熟を齎すのであるが、これが外光派アカデミズムに飽き足りないものを感じていた本校卒業生や生徒にとっても格好の活躍舞台となったことは言うまでもない。二科会発足以前、明治四十二年には斎藤与里が帰国してフォーヴィズムの影響を受けた作品を公開し、同四十三年には新様式の洗礼を受けた藤島武二、湯浅一郎、有島生馬、南薫造、山下新太郎らが次々と帰国、同年創刊の『白樺』は盛んに印象派、後期印象派を紹介し、高村光太郎が芸術表現の自由を唱えて美術評壇で活躍した。その中で、本校生徒たちがアブサント同人小品展を開き、後期印象派の影響を濃く作品を発表したり、卒業したばかりの山本鼎らが新しい芸術を求めて『方寸』を発行したりしている。そして、大正元年秋には岸田劉生、木村莊八、斎藤与里、萬鉄五郎、真田久吉、松村巽、碓伊之助、清宮彬、高村光太郎ら青年たちがフューザン会第一回展を開き、後期印象派やフォーヴィズムの影響を受けた作品を発表した。同会が翌二年に第二回展を開いて解散したあと、アカデミズムに反抗する若手作家たちが作ったのが二科会であった。その結成の背景や経緯については諸書に取り上げられているので、ここでは石井柏亭著『日本絵画三代史』（昭和十七年。創元社）の「二科会と海外の新潮」の展覧会概況の部分を用いる。なお、参考のため〔一〕に本校西洋画科卒業年度等を附記する。

第一回二科展の鑑査員は其運動の賛成者の中で互選した結果小杉〔未醒〕・九里〔四郎。明治四十三年〕・石井〔柏亭〕・大野〔隆徳。明治四十四年〕・柳〔敬助〕・津田〔青楓〕・有島〔生馬〕・南〔薫造。明治四十年〕・齋藤〔豊作。明治三十八年〕・梅原〔龍三郎〕・田邊〔至。明治四十三年〕・湯淺〔一郎。同三十一年〕・坂本〔繁二郎〕・岸田〔劉生〕・山下〔新太郎。明治三十七年〕の十五名であつたがそれらの理由の下に南・岸田・大野・九里の四人は委員を辭した。田邊は第一回に出品したが、其開會中に脱退を告げ、又柳は第二回以後は出品を見合せてこれも脱けた。柳の退會は生活問題に關聯してゝあつた。

第一回展の會員作品では有島の「鬼」梅原の「早春」などが問題になつた方であつた。人はもつと變つた作品の集まることを期待したかも知れぬが、山下・坂本・小杉・齋藤にしても私にしても矢張從來の傾向を續けたに過ぎず、たゞ其採擇するものが文展と選を異にして居たのであつた。例へば第一回に二科賞を受けた碓伊之助の習作（裸體の習作幾つをも一つの畫布に收めた）と十龜廣太郎の赤綠對照の強烈な小品などは到底文展で認めらる可くもなかつた。

文展と同期では上野に會場が得られないので二科は其二回と三回とを三越の狭い樓上で開くことを餘儀なくされた。二回には新歸朝の安井曾太郎が新たに會員に加はつて其滯歐作品四四點の特別陳列があつた。安井はミレヤピサローの感化を受けたものとセザンヌの影響下にあるものとの多くを列べて、其中間或時代のものを加へなかつた。「足洗ふ女」などの堅實な代表的作品も其中

に在つて安井の價值は一時に認められた。安井は健康を害して巴里から歸つて來たのであるが、靜養の結果漸く常態に復することを得た。

第三回展にはこれも新歸朝の正宗得三郎（明治四十年）の滯佛諸作が特別陳列された。印象主義風のものが多くを占めて居たが、「日本の婦人」と題する夫人の夏姿を畫いた一點はアンリー・マチスの感化を受けた新しい試みであつたが、正宗の將來したマチスの青つばい男の「裸體」は代表的なものではないにしても、日本でははじめて見るものであつた。

大正六年其四回からは必ずしも文展と同時になしに同季に開いたらよからうと云ふことになつて、文展に先だつ九月中に日本美術院と隣り合つて竹之臺に開くことになり、この例は今の府美術館が出来る様になつても踏襲された。さうして回を重ねるにつれて宣傳も利くやうになり觀衆を吸収することにも成功した。

小杉と森田〔恒友。明治三十九年〕とは院展と二科と兩者に跨ることが無理である爲に其第四回以後退會し、熊谷守一（明治三十七年）が新に加入した。梅原もこれと云ふはつきりした理由でなしに五回以後會員を辭したが、畫は其後も一回位出して居た。

二科會が世に送り出した新人は相當の數に上つて居るが、碓伊之助・鍋井克之（大正四年）・東郷青兒・横井弘三・横井禮市（明治四十四年）・林俊衛・小出楯重（大正三年）・國枝金三・中川紀元・中川一政・兒島善三郎・古賀春江・木下孝則・林重義・木下義謙・佐伯祐三（大正十二年）・里見勝藏（同八年）・小島善太郎・中山巍（大正九年）・鈴木保徳（同五年）・野間仁根（同

十四年」・川口軌外・清水登之・伊藤廉〔大正十四年〕・關根正二・曾宮一念〔大正五年〕・鈴木信太郎・向井潤吉等は其主なるものである。中には樗牛賞二科賞を受けながら、其後發展の思はしくないやうな除外例の僅かはあるが、大抵は今日種々の團體に據つて現役的に働いて居る人々や惜まれて夭折した人々である。こゝに擧げた名前のなかでは小出・古賀・關根の四人が故人となつて居る。

### ⑬ 東京美術学校規則改正

前記規程改正に基づき、大正三年十二月に「東京美術学校規則」が改正された。その全文と、参考のために「各科授業要旨」とを左に掲げる。いずれも『東京美術学校一覽從大正三年至大正四年』より転載。

#### 東京美術学校規則（大正三年十二月改正）

##### 目次〔省略〕

##### 第一章 總則

第一條 本校ノ學科ハ日本畫科、西洋畫科、彫刻科、圖案科、金工科、鑄造科、漆工科、製版科及圖畫師範科トス

日本畫科、西洋畫科、彫刻科、圖案科、金工科、鑄造科、漆工科、製版科ヲ本科トシ各専門ノ技術家ヲ養成スルヲ主旨トス

圖畫師範科ハ師範學校、中學校、高等女學校ノ圖畫教員タルヘキモノヲ養成スルヲ主旨トス

前項ノ外豫備科ヲ置ク

第二條 本校各科ノ修業年限ヲ定ムルコト左ノ如シ

課目	每週教授時數					卒業期
	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	卒業期	
修身	一	一	一	一	一	不定時
實習	二	二	二	二	二	卒業製作
解剖學	二	二	二	二	二	不定時
遠近法	二	二	二	二	二	不定時
圖案法	二	二	二	二	二	不定時
美術及美術史	二	二	二	二	二	不定時
歷史及考古	三	三	三	三	三	不定時
外國語	二	二	二	二	二	不定時
用器畫法	八	八	八	八	八	不定時
木炭畫		(四)	(四)	(四)	(四)	不定時
鉛筆畫		(四)	(四)	(四)	(四)	不定時
水彩畫		(四)	(四)	(四)	(四)	不定時
教育學及教授法	二	二	二	二	二	不定時
體操	二	二	二	二	二	不定時
計	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇	卒業期

製版科ヲ除ク外各本科ハ豫備科ヲ通シテ五箇年トシ入學ノ始ニ於テ一學期間豫備科ヲ履修セシメ最後ノ二學期間ハ専ラ卒業製作ニ從事セシム

第二章 學科課程

第三條 豫備科、本科及圖畫師範科ノ課目并ニ其程度左ノ如シ

日本畫科